

暮らしの



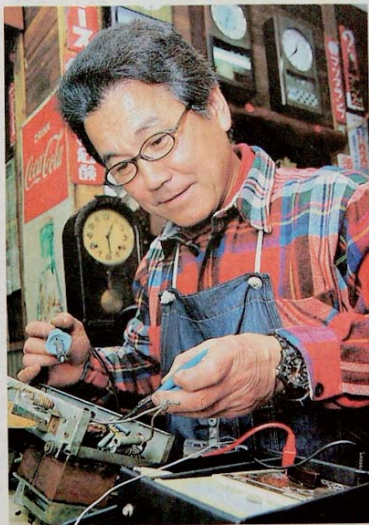
「ボーン、ボーン」。店内にある商品の柱時計次々と鳴った。日回。ふ実家の柱時計を思い出し、幼少時代の記憶に浸った。

時計だけではなく、昭和30年代のブラウン管テレビや真鍮のラジオなど、実家は使ったことのない代々のもの。電化製品も雑貨にまで、どこか懐かし気持ちにさせられた。

レトロな筆箱や雑貨は、インテリアとして取り扱われることが多い。しかし、修理のできる骨董屋「大場敬志さん」を掲げる大場敬志さん(福岡市南区)は、電化製品が本来持つ実用性を再生させることで、新しい魅力を加える。

「壊らないものは、鳴らないもの。動かないものは走らないのがボーン」。店の名「Raku(楽)」が表すように、取り扱われる電化製品自身で修理してよいかをまず判断する。何より「関心を基に、古い電化製品を直すのが面白

修理のできる骨董屋 大場 敬志さん (福岡市南区)



「修理が大変なほど、直してやろうと思う」と大場敬志さん。ほろほろのラジオを見て「これはひどいなあ」とつぶやきながらも笑顔がこぼれる

おぼけしい。1933年、岩手県釜石市出身。小学1年で近所の先輩に影響を受け、カメラ・フィルムラジオを自作したのをきっかけに電子工作のめり込んだ。東の電子メーカーに就職後、福岡営業所に勤務していた。00年、49歳で早期退職。03年、福岡市南区溝田に骨董屋＆リサイクルショップ「Kakko」をオープンさせた。修理の相談も受ける。同日「Otonari」の連載もスタート。

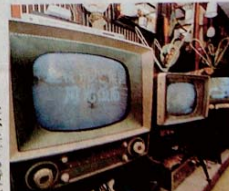
古き良き家電残したい

30年以上前投じ目を終った家電に新たな命を吹き込む作業は、素人目には少し手強く見える。テレビやラジオの内部にある部品は複雑だが、一つ一つを慎重に確認し、水洗いを。天日干し

に「壊れ修理に取り掛かる。電化製品にとって水気は厳禁のはずだが、修理の際は必要最低限とど、元生きているものに水は駄目です。ど、長はほかに取付けたまままだが汚れをすすがすのが大事なんです。直す前に、きれいにしリフレッシュさせてあげる感してすね」

姿を消しつつある古き良き物や、昔の技術を残したいと思うもある。手仕事による造形は、今の電化製品にはないものが多いからだ。

例えばテレビ、木製のホテイは何層も重なった薄い板を職人が曲げて作っているのだ。「専らそのつくりをしてきた時代のもをを残したい



昭和30年代の白黒テレビ。修理の際、DVDプレーヤーが接続できるように改造を施した

くね。昔の職人に対する尊敬の念がこぼれ、それだけに、外見だけでなく、内部も当時の仕様とこだわる。

古い電化製品を求めると、どれほどなのか、最初は入らなかつた。心引かれ多いイチ(佐々木樹野)

投稿情報(ご意見は)→

西日本新聞 FAX 092 7111 6243
文化放送生活班 電子メール bunkaka@nishinippon.co.jp

生活

ゆとり